世界名作劇場

小公女セーラ
（プリンセス）

『壁の向う側の秘密』

第 32 話

提供 ハウス食品工業

制作 日本アニメーション
フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第32話「壁の向こう側の秘密」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
モリー
ジェームス
クリスフォード氏
ラム・ダス
カーマイケル弁護士

ドナルド

ジャネット

（母親）

エミリー（人形）

シーザー（猫）

ハリジャン（猿）

ボリス（アフガン犬）

メルの一家（ネズミ）

1

ミンチン女学院・裏屋根の上（朝）

——雀が舞い、
——遠く夏の入道雲が昇り、
——教会の鐘の音が聞えている。

×　×　×

天窓が開き、顔を出すセーラと、既に帽子姿のベッキー——隣家の天窓に向って明るく声をかける。

セーラ「ラム・ダスさん！……お早う！」
ベッキー「お早うございます、お隣りさん！」

×　×　×

だが、隣家の天窓は、閉されたまま開く気配もない——

×　×　×

セーラとベッキー、不安に顔を見合せる。

セーラ「どうしたのかしら。ラム・ダスさん」

ベッキー「あのお猿の啼き声も聞えませんですしねえ」
セーラ「まさか、御主人の病気が悪くなっているのでは……？」

2 隣家の表

馬車が着き、ラム・ダスと、医師、看護婦二人が降り立つと中へ消える――

3 同・居間

燃える暖炉――背を見せて車椅子に坐っているクリスフォードの後姿。
その傍に、ボリスが坐り、ハリジャンがオレンジの皮をむいている――
入って来るラム・ダス――

ラム・ダス「御主人様……お医者様をお呼びして参りましたが……」
背を向けた儘のクリスフォードが、力のない病的な咳をする。
ラム・ダス、後方に振向く——心配そうに足音を殺して入って来る医師と看護婦二人。
ラム・ダス、頷いてみせる——

4 ミンチン女学院・ミンチンの居室

ベッドで——遅い朝食のトーストを食べているナイトキャップのミンチン。
傍のテーブルで、セーラが紅茶を注ぎ直している——
ドアが開き、着換えたアメリアが浮き浮きと入って来る——
アメリア「お早うございます、お姉様！」

ミンチン「お早う……食事はすんだのね」
アメリア「ええ、とうに……ね、お姉様、お聞きになりまして？
　お隣りに越して来た御主人のこと」
ミンチン「隣りが、どうしたと云うのです」
アメリア「モリーが聞いて来た噂ですとね、インドで、大鉱山を経営していた、大金持ちの、イギリス紳士なんですってよ
　！」
　はっと見るセーラ――
　トーストを持ったミンチンの手が停る。
ミンチン「インドで、鉱山……」
　アメリア、手を胸に、勝手に夢見る――
アメリア「ええ……御病気とかで、引上げて見えた様子ですけど…
　…まだ三十代で、その上、独身なんですってよ！」
　ミンチン、怒りが燃え上る――気づかずに窓へ行き、
　隣家をうかがうアメリア。

アメリア「ね、お姉様……私、お隣り同志として、御挨拶に上って
おこうかしら」
ミンチン「（怒鳴る）アメリア！」
仰天して窓から振返るアメリア――
アメリア「は、はい、お姉様……」
ミンチン「なにがインドで大鉱山よ！」
アメリア「えっ？」
ミンチン、意地悪くセーラを見やる。
ミンチン「フン……ここにも居ます！……ダイヤモンド鉱山とかで、
さんざん人をだまして……挙句の果に、破産して死んだ
男の厄介娘がね――
じっとうつむいて耐えるセーラ――その手が震えてい
る。
ミンチン「全く、想い出すだけでも、腹が立つわ……」
ようやくアメリアに視線を移す。

5

同・階段

ミンチン「アメリア……」
アメリア「は、はい、お姉様……」
ミンチン「大方、隣りの男も、インドでひと山当てようとした山師に決ってます。病気なら結構、いずれどこかへ出て行くでしょう。わざわざ附合う必要なぞ毛頭ありませんからね！」
アメリア「（渋々）は、はい、お姉様……」
ミンチン「下げて頂戴！」
乱暴にトーストを盆に突き捨てる――
セーラ「はい、院長先生……」
セーラ、その盆を下げて、そっと出て行く――
気の毒そうに見守るアメリア――

眠っていたシーザーが、眼をさまし、大きく伸びをする――

盆を下げて降りて来るセーラ、立停り、じっと考える。

セーラのM「お隣りの御主人が……お父様と同じようなお仕事をしていらしたなんて……」

セーラ、息をつくと、又、降りて行く。

のっそりと続いて行くシーザー――

6 同・台所

盆を下げて戻って来るセーラ、戸口でふっと立停る――

鍋を拭いているベッキー――

その向うに、仕事を終えたモリーとジェームスが、椅子に掛けて世間話を続けている――

モリー「そおともさ……なにしろ鉱山に手を出す位危い事はないっ

て話だからねえ……」
ジェームス「成功するのは、ほんの僅か、あとは注ぎ込んだ財産を
スッテンテンにすっちまうか」
モリー「お隣りの旦那みたいに、病気をしょい込んで引上げて来るか……」
ジェームス「その両方かって訳だ……俺たちだって、そんな例を身近かに見てるじゃねえか……財産をすっちまった上、病気でおっちんじまったセーラの親父……」
その時、カタリ……と物音。
ジェームス、モリー、ベッキーたち、一斉に振り向く
――
――入口に近いテーブルに、下げた盆を置いたセーラの姿。
ベッキー「お嬢さま……（驚いて近づく）」
ジェームス「な、なんでえ……そんな所で聞いてやがったのか」

モリー「フン……下げて来たら下げて来たって、ちゃんと云ったらよさそうなもんなのに……」
セーラ「すみません……お話中だったものですから……」
ジェームス、モリーと顔を見合せると、買物籠を摑んで近づく――
ジェームス「ほれ、市場へ行く時間だ。買うもんは、昨日と同じだよ」
セーラ「はい、ジェームスさん」
モリー「ベッキー！ ……ボヤッとしてないで、そこが終ったら玄関の掃除だよ！」
ベッキー「は、はい、ただいま……」

7 同・表

使用人階段の下に出て来る買物籠を手にしたセーラと、

掃除道具を持ったベッキー――階段を上り、はっと隣家の方を見る。

×　　×　　×

隣家の玄関から――ラム・ダスに丁重に送り出された医師と看護婦二人が、応答して、停っている馬車に向うのが見える。

×　　×　　×

セーラ「矢っ張り……また、お医者様が見えていたんだわ」

ベッキー「まあ……………お隣りの御主人様は、余程お悪いんでしょうか」

セーラ「そうでなければ、いいのだけど……」

セーラ、走り出す馬車から、隣家へ眼を移す――

セーラのＭ「お気の毒に……きっと、あの方は、インドでお父様と同じようなひどい目におあいになったのよ……そして、お父様と同じように、ご病気になったのだわ……」

8 道

じっと、隣家をみつめるセーラ——

セーラのM「そうよ……お父様と違うのは……あの方が、助かって帰って来られたことだけ……」

買物籠を抱え、俯向いて来るセーラ、ふっと足を停め、一方を見る。

——小さな教会の前である。

セーラ、その入口に足を向ける——

9 小さな教会の中

そっと椅子につくセーラ、合掌する——

セーラのM「神様……どうか、あのお気の毒な方が、お元気になれ

ますように……おめぐみをお与え下さい……」

祈るセーラ――

×　×　×

その姿を――離れてじっと見守っている老司祭がいる。

10 コベント・ガーデン市場の一角

撒水車が通り――水浴代りの子供たちが歓声と共に追う。

11 同・馬の水呑場

沈んだセーラを――野菜の詰った籠を抱えたピーターが送って来る。

ピーター「そうだったんですか……お隣りに越して来た紳士が、旦

那様と同じような仕事をねえ」

セーラ「ええ……その事を聞いて、私、余計お隣りの御主人の御病気の事が心配になって……」

ピーター、ふっとセーラを見る――

セーラ「だって……亡くなったお父様も、きっとインドで、あの方と同じように病気で苦しんでいらしたんだわ……そう思うと、とても他人の事とは思えないのよ……」

ピーター「判りますよ……お嬢さんのお気持……」

――歓声と共に子供達が走り抜ける。

12 道

野菜籠を抱えて帰って来るセーラ――

行手に、男の子の声が呼ぶ。

声「パパ！……早く来てエ！」

セーラ、はっとその方を見て足を停める。

13 ある家の前

停った馬車へ敷かれたジュータンの上から、玄関に向って手を振っているドナルドの姿——

×　　×　　×

セーラ「まあ……あの時の男の子だわ」

14 フラッシュ（第十八話より）

ドナルド、ポケットを探るとコインを出す。

ドナルド「さ、これをあげるよ。なにか買って食べるといいよ」

セーラ「そ、そんな……御親切は嬉しいんですけど、ほんとうによろしいんです」

ドナルド「駄目だよ、受取ってくれなくては……さ」
　　ドナルド、セーラの手にコインを押しつける。

15

ある家の前

　　セーラの顔に、微笑が浮ぶ――
×　×　×
ふと振返ったドナルドが、セーラの姿に気づく――
ドナルド「あれ？　……君は……？」
×　×　×
　　ドナルド、急いでセーラに駆け寄る。
ドナルド「……あの時の人だね！」
　　セーラ、微笑で頷く――
セーラ「あの時は、ご親切に、有難うございました」
ドナルド「いいんだよ、そんなこと……それより、ぼく、君にあや

まらなくちゃ……」
セーラ「えっ……あやまるって、なんのことですの？」
ドナルド「君を、可哀想な野菜売りの少女と間違えちゃった事さ」
セーラ「え？」
ドナルド「お姉さんもママも、君がとても上品で賢こそうだから、ほんとは昔、お嬢様だったかも知れないって……」
セーラ「まあ……」
ドナルド「ほんとなの？」
セーラ「い、いいえ、そんなことないわ」
ドナルド「なあんだ……」
ドナルド、幼児特有の飛躍で話題が飛ぶ。
ドナルド「ね、君……ぼく、今日、どこにお出掛けするか知ってる？」
セーラ「（微笑で首を振る）いいえ」
ドナルド「パパの知り合いの人の所へ、お見舞いに行くのさ」

セーラ「お見舞？」
ドナルド「その人、病気なんだよ……でも、ぼくとお姉さんが行くと、とても元気が出るんだって」
セーラ「まあ……」
その時、玄関の中から男の声——
声「ドナルド！……ドナルド！」
ドナルド「（振返り）はあい、パパ！」
× × ×
玄関口に——花束を手にしたジャネットを送って母親が、続いて父親（カーマイケル弁護士）が出て来るのが見える。
× × ×
ドナルド「じゃ、またね」
駆け去るドナルド、ジャネットと父親と馬車に乗り込み、走り出す。

見送って立尽すセーラ——

——C・M——

16 ミンチン女学院・前の広場

買物籠を抱え、広場を抜けて来るセーラ。

17 同・表

広場を抜け出たセーラ、ふっと足が停る。

× × ×

隣家の前に停っている馬車——

× × ×

セーラ「まあ……カーテンが開いているわ」

× × ×

隣家の居間の張り出し窓のカーテンが、開かれている

——

× × ×

セーラ「誰方か見えているのかしら……」

18 同・地下の作業場

掃除道具を手に、セーラにうなづいてみせるベッキー

——

ベッキー「ええ、そうなんでございます。私がお玄関の掃除をしていましたら、お隣りにあの馬車が着きまして、小さなお客様が、お隣りに……」

セーラ「小さなお客様……？」

そこへ、モリーが顔を出す ——

モリー「なんだい、帰ってたのかい……院長先生におこられちまったよ。さ、早く二人で、教室のカーテンを外して、洗濯しといておくれ」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

19

同・教室

窓に掛けた梯子から、外したカーテンを抱えて降りて来るセーラ――

梯子を押えていたベッキーが受け取る。

セーラ、ふっと一方の壁を見る――

セーラ「ね、ベッキー」

ベッキー「はい？」

セーラ「この壁の向う、丁度お隣りの居間に当るんじゃないかしら」

ベッキー「まあ……そうなるんでございましょうか」

セーラ、壁に近寄る――ベッキーもそっと壁に寄り、耳をすます。

ベッキー「お嬢様……なんの音も聞えませんですが」

セーラ「そう……私、心配だったのよ……夏休みが終ると、また、この教室が使われるようになるでしょ？」

ベッキー「ええ……」

セーラ「休み時間の騒ぎなんかが、お隣りに聞えて、御病気にさわるんじゃないかしらって……」

ベッキー「まあ、お嬢様……」

20 隣家の居間

暖炉の前に――車椅子に坐って、じっと燃える火をみつめているクリスフォード。

その脇に伏せているボリス――

対した椅子に――クリスフォードを見守って坐っているカーマイケル弁護士。

そっと口を切る――

カーマイケル「クリスフォードさん……」

クリスフォード、凝然と動かない。

カーマイケル「実は、あのお医者が、あなたのご病気の事で、こう申したのです」

クリスフォードを見ながら続ける――

カーマイケル「インドでかかった熱病は、とうに直ってる筈だが、御主人の御病気は、もしかすると、心の病気なのではないか、と……」

クリスフォード「当っているかも知れん」

じっと火をみつめているクリスフォード。

カーマイケル「だとしたら、ご病気を直せるのは、あなた御自身です……過去の悲しみをお忘れになって、元気を取戻して頂かなくては……」

撫然と動かないクリスフォード――

その時、突然、一方の扉が開いて、ドナルドと、続いてジャネットが飛び込んで来る――

ドナルド「パパ……！」

振り向いたカーマイケル、口に指を立て、

カーマイケル「シイッ……」

そっと立上ると、近づく――

カーマイケル「（小声）ドナルド……いい子だから、静かにしているんだよ」

はっとクリスフォードの背を見るドナルド――ジャネットが小突く。

ジャネット「（小声）だから云ったでしょう」

その時、背を向けた儘のクリスフォードが、低く口を開く――

クリスフォード「ドナルドに、ジャネット……ここへおいで」

ドナルドとジャネット、顔を見合せる。

カーマイケルが、（行け）と頷いてみせる――

ドナルドとジャネット、そっとクリスフォードの車椅子の傍に進む――

ドナルド「ごめんなさい。クリスフォードさん……ぼく、パパとのお話、もう終ったと思ったんです」
クリスフォード「そんな事はどうでもかまわん……それより、なにをして私を待っていてくれたのだね」
ドナルド「ぼくたち、ラム・ダスさんと一緒に、屋根裏部屋へ上ってたんです」
クリスフォード「ほう……面白かったかね」
ドナルド「ええ、とても……ラム・ダスさんに聞きましたよ。この間、お猿が、お隣りの屋根裏部屋に逃げ込んじゃったんですってね」
クリスフォード「そうだったそうだな」
ドナルド「残念だなあ、ぼくがいればすぐ捕えてあげたのに……」
ジャネット「ドナルドったら！」
カーマイケル「さ、ドナルド……お父さんたちは、まだ大事な話が残っているんだ」

ドナルド「
クリスフォード「では、すまんが、私のためにそれを引いておくれ」
ドナルド「はい!」
　ドナルド、暖炉の脇の引綱を引く。
　――遠く、鈴の鳴る音。
　やがて、扉が開き、ハリジャンを肩にのせたラム・ダスが現われる。
ラム・ダス「お呼びでございますか、御主人様」
クリスフォード「この子たちと、遊んでいておくれ」
ラム・ダス「畏まりました……」
　一礼すると、微笑でドナルドとジャネットを促す――
ラム・ダス「さ、参りましょう」
ドナルド「うん……」
　ドナルドとジャネット、ラム・ダスと一緒に扉を出て行く――

じっと見送るクリスフォード――

クリスフォード「有難う、カーマイケル君……君の子供たちが来てくれると、心に苦しみを持っている私も、少しは元気が取戻せるような気がするよ」

クリスフォード、ふっとその眼をカーマイケルに向ける――

クリスフォード「君は、私の顧問弁護士として、充分に私の苦しみを解ってくれている筈だな」

カーマイケル「勿論ですとも」

クリスフォード「私は、どんな事をしてでも親友ラルフの一人娘を探し出さねばならないのだ……」

21

ミンチン女学院・地下の洗濯場

懸命にカーテンを洗っているセーラの姿。

——クリスフォードの声がかぶる。

クリスフォードの声「生きていれば、どこかにいる筈だ……そして、その子が頼る者もなく、お金にも恵まれていないとしたら、それは私のせいなのだよ」

22 同・裏庭

ベッキーと出て来るセーラ、抱えた洗濯物のカーテンをロープに干しはじめる。

——クリスフォードの声がかぶる。

クリスフォードの声「可哀想に……その子は、我々が、ここでこうしている今も、何処かで、辛く、苦しい暮しを続けているかも知れないのだ……」

23 隣家の居間

クリスフォード「その子を、そんな不幸におとし入れた責任は、全
てこの私にあるのだよ……」
クリスフォード、じっと暖炉の火をみつめる——
カーマイケル「クリスフォードさん……そのように、自分で自分を
お責めになってはいけませんよ」
クリスフォード、静かに首を横に振る。
クリスフォード「私は、イートンで一緒に学んだ親友、ラルフを破
滅させてしまったのだ……そして今、彼と共同で
経営していた鉱山が、これ程うまく行って、二人
の夢がすべて実現したと云うのに、そのラルフの
一人娘は、行方さえ知れないのだよ」
クリスフォード、じっと燃える暖炉の火をみつめる——
クリスフォード「ラルフは、一人娘の事を、よくふざけて、私の小
さな奥さん、と呼んでいたよ……こうして、火の
色をみつめていると、元気だった頃のラルフの顔

が浮び上って来るような気がする……」

24 イメージ

燃える暖炉の火に――浮び上るラルフ・クルーの顔。
――クリスフォードの声がかぶる。
クリスフォードの声「そして、私に向って、こう云うんだ……トム、
私の小さな奥さんは、どこにいるんだね、と」

25 隣家の居間

暖炉の火をみつめているクリスフォード、うめくよう
に続ける――
クリスフォード「私は、ラルフに返事をしなければならない！……
どうしても、その子を探し出さなければならない

のだ！」

カーマイケル「気をお静め下さい、クリスフォードさん……その子が見つかりさえすれば、ラルフ氏の残した財産を、そっくり譲ってあげる事が出来るのですから」

クリスフォード、首を横に振る――

クリスフォード「ラルフの分だけではない……私は、罪ほろぼしに、私の財産全てを、その子に譲ろうと決心しているのだよ」

カーマイケル、静かに頷いてみせる――

カーマイケル「お話の様子では、その子の亡くなった母親は、フランス人だったようですね」

クリスフォード「その通りだ……だから私は、ラルフが一人娘を留学させた先は、パリに違いないと考えているんだよ」

クリスフォード、深く吐息する。

クリスフォード「確かな証拠は、なにひとつない……だが、あのラルフが一人娘の教育を、是非愛する妻の母国でと考えるのは当然だろう」

カーマイケル「判りました……では、早速パリ中の寄宿学校を当って、手掛りを探して来る事にしますよ」

クリスフォード「頼む……私が自由に動ける身体なら、是が非でも君と一緒に行く所なのだが……」

カーマイケル「御心配なく……しかし、せめてその子の本名だけでも判っていたら、ずっと話は早かったのですが……」

クリスフォード、悲し気に首を振る――

クリスフォード「無理だよ、カーマイケル君……私は、ラルフからその子の本名を聞いたかどうかさえ想い出せないでいるのだから……」

クリスフォード、苦悩に両手で頭をかかえる――

クリスフォード「きっと、あの恐ろしい熱病が、私の記憶を、根こ

そぎ焼き払ってしまったのだよ……」

カーマイケル「クリスフォードさん……」

気づかって見守るカーマイケル――

クリスフォードの肩が小刻みに震えている――泣いているのだった。

26 ミンチン女学院・地下の作業場（夜）

カーテンにアイロンをかけているセーラと、ベッキー――

寝巻姿のモリーが顔を出す――

モリー「いつまでも火を使ってるんじゃないよ。院長先生に灯り代をやかましく云われてるんだからね」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

モリー、出て行く――

27 同・三階廊下（夜）

暗い階段を上って来るセーラとベッキー。

28 同・屋根裏部屋（夜）

ドアが開き、入って来るセーラ、ドア外のベッキーに挨拶する——

セーラ「おやすみ、ベッキー」

ベッキーの声「おやすみなさいまし、お嬢様」

ドアを閉めたセーラ、ほっとテーブルに来る——その上に父母の写真。

セーラ、そっと取上げる——

セーラのM「お父様……もう、随分昔のような気がするわ……私が、お父様の、小さな奥様、だったのは……」

じっと写真をみつめるセーラ――

×　×　×

壁穴から出て来たメルの一家が、一斉にセーラを見上げて、首を傾げる――

おわり